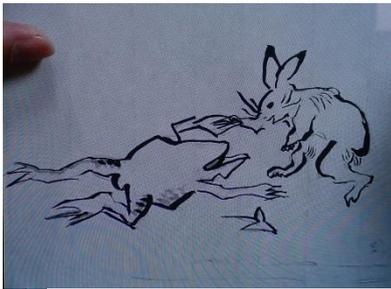


オリガミアンだより

第48号

2021年6月17日発行



「鳥獣人物戯画」の中ではカエルさんとウサギさんは相撲の良きライバル。勝ったり負けたりしているようです。それにしても楽しそうですね。 京都・嵯尾山 高山寺蔵

躍動する「カエル」を覚え

鳥獣戯画の世界に遊ぼう

8月には「ウサギ」を実習



「カエルさん」と「ウサギさん」

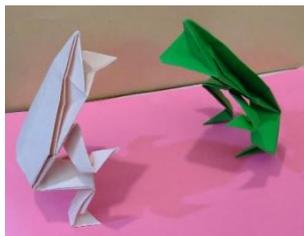
教室で伺っていますと皆さん、幼いころは結構、自然豊かな所で育たれたようです。7月のテーマである「カエル」にも親しみがあるのではないのでしょうか。私も田舎暮らしだったので「カエル」はしょっちゅう触れていました。というより嫌がられても嫌がられても追いかけて回していました。おもちゃというより、どちらかという友達感覚でしたね（先方は迷惑この上なかったと思いますが）。

コロナ禍でステイホームをしているうち、6月の梅雨シーズンは終わってしまいそうですが、今回は雨空に似合うカエルさんを取り上げようと思います。

上手に折るとすっと立ち、迫力満点です。

以前、『オリガミアンだより』第27号で紹介した『本格折り紙√2』 前川 淳著 日貿出版社 で紹介されている作品です。『本格折り紙』と並び、折り紙界の至宝と言われる2冊です。繰り返しますがBOOK-OFFなどで目にされたら即購入することをお勧めします。

国宝「鳥獣戯画」を意識して8月にはカエルさんの相撲の好敵手である「ウサギさん」（折り図のみは「オリガミアンだより」第25号で紹介済み）を取り上げます。お楽しみに。



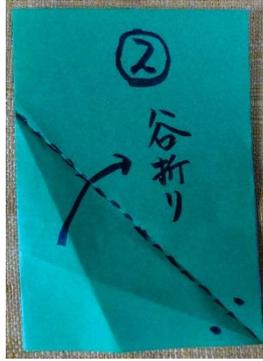
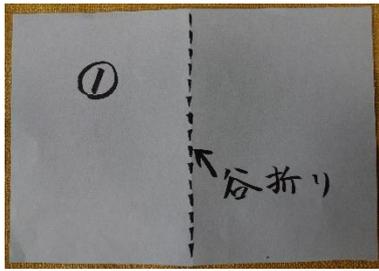
紙を選び丁寧に折れば、この通り立ち上がらせるのも夢ではありません。難しければ脚の裏に糊を塗り、厚紙に貼り付けても面白いです



別バージョンのカエルさん。がまのような迫力があります

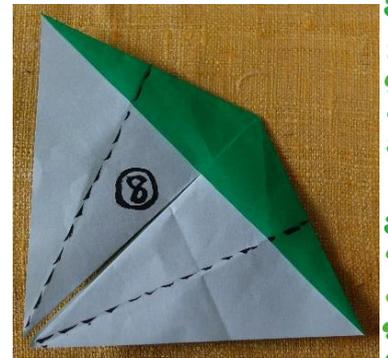


せっかくなので本物にも登場願いました



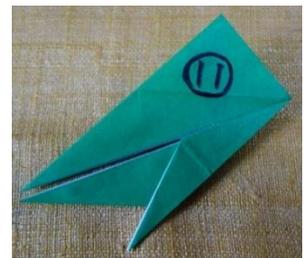
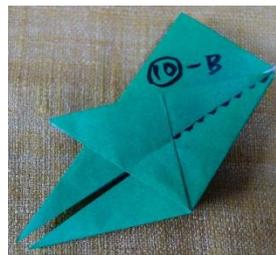
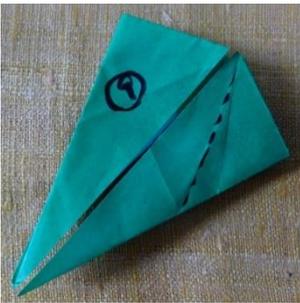
1: $\sqrt{2}$ の紙を使います。市販のA4判カラーコピー紙を半分に切ってから折り始めてください。A4判の色画用紙も同様にして使えますが、やや分厚いのが難。普通の折り紙をカット(「オリガミアンだより」第13号で紹介)する方法もあります。1: $\sqrt{2}$ の紙は横にカットする限り、大きさは変わっても縮尺はどこまでも同じという特色があります。色ばかりでなく大きさもいろいろ工夫してみてください。

④、⑤は「鶴の基本」の要領で



⑤の三角形のヤマの部分を反転させて中へ折り込む。この部分を大きく広げるようにして中側に折り入れるのがコツ。こうした上でひっくり返し、裏側を上にする(⑦になる)

⑦の赤いラインに沿うよう斜線の部分を折り返し⑧の形にする



⑧の白い部分を隠すように折る

⑨を点線で中割り折り(⑩-Aで下側にあるラインに合わせるのがコツ)

⑩-Bのラインで折り⑪の形にする



⑪と同じ要領で

中の部分を引っ張り上げ、この形にする

赤い点線に沿って折る

点線の3カ所を谷折りして口のスペースを確保、引っ張り上げる。前脚の部分を整えギリギリまで上に折り上げる



前脚部分を折り整える



後ろ脚の部分（脚裏）の面積をなるべく広く取ることがコツ。誌上では説明できない部分が多いので後は教室で説明します



完成。上手に立ち上がりましたか？

がまの油

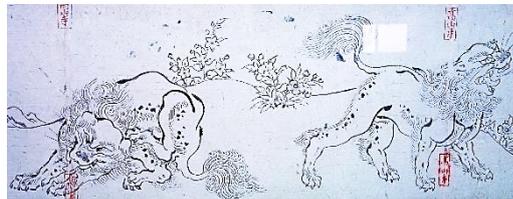
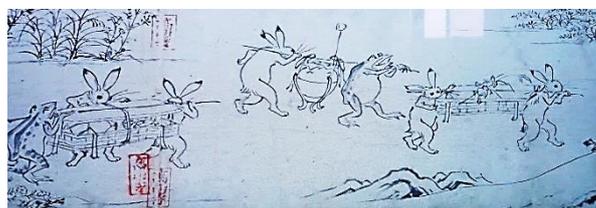
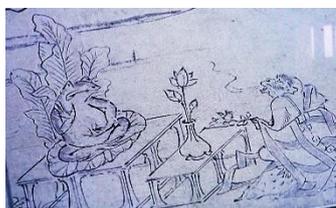
てまえ持ちいだしたるは、しろくのがまだ。しろく、ごろくはどこでわかる。前足の指がよんほん、あと足の指が六本、これを名づけてしろくのがま。このがまの棲めるところは、これよりはる一か北にあたる、筑波山のふもとにて、おんばこというつゆ草を食らう。このがまのとれるのは、五月に八月に十月、これを名づけてごぼつそうはしろくのがまだ、お立ちあい。このがまの油をとるには、四方に鏡を立て、下に金網をしき、そのなかにかがまを追いかむ。がまは、おのれのすがたが鏡にうつるのをみておのれとおどろき、たらーり、たらりと油汗を流す。これを下の金網にてすきとり、柳の小枝をもって、三七二十一日のあいだ、とろーり、とろりと煮つめるがこのがまの油だ。

黒紋付の着物に袴をはき、白はちまき、白だすきという独特の格好。いまではあまりなじみがなくなったが、かつて「がまの油売り」はセールストークのエースだった（と言っても私は縁日で本物を見たことがないような気がします）。「さあさ、お立ちあい、ご用とおいそぎのないかたは、ゆっくりと聞いておいで」という文句から始まる（ようだ）。

歯切れとテンポの良さに加えて、内容の徹底したばかばかしさが楽しい。がまが自分の姿を鏡を見て、たらーり、たらりと油汗を流すという図は、荒唐無稽でありながら、なぜかクリアに想像できてしまう。あり得ないことにリアリティを与えてしまう言葉の力が見事だ。

（以上、『声に出して読みたい日本語』 齋藤 孝著 草思社 から引用）

がまの油は実に楽しいですね。出版の趣旨にあるように本来は「声に出して読みたい日本語」の一つです。ご家族やお孫さんと一緒に朗読されてはいかが？



鳥獣人物戯画 京都・栴尾山 高山寺蔵